



三月前期の文学と政治

人文科学系・言語文化学領域

児玉 麻美

准教授 KODAMA Asami

博士(文学)(京都大学)

■研究キーワード ドイツ文学, 女性解放運動, ジェンダー

■主な所属学会 日本オーストリア文学会, 日本独文学会

■研究者総覧 <https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.1f1336a271be499f520e17560c007669.html>

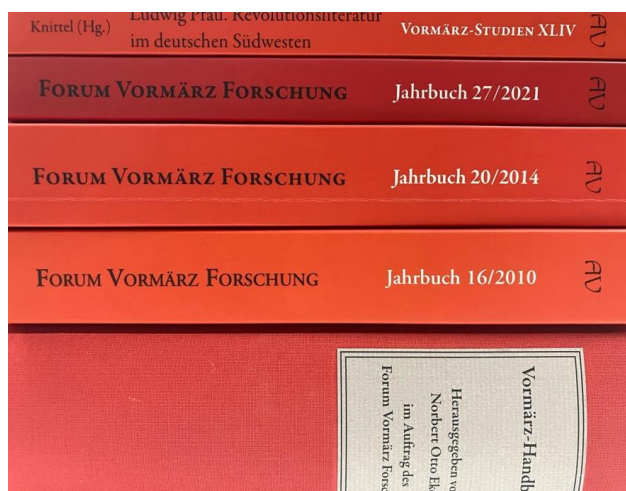


研究者総覧

研究概要

19世紀前半のドイツ語圏における女性知識人(作家、革命家、雑誌編集者等)の社会・政治運動への関わりを明らかにするための研究を行っています。雑誌記事や文学作品といった一次資料の収集・精読を通じてその実像を解明し、同時代人たちによる評価を分析した上で、彼女らが及ぼした影響の程度や範囲を具体的に検証することを目指しています。現在は、とりわけ影響力が大きかったと見られる作家ルイーゼ・アストン(1814-1871年)とその周辺人物(エマ・ヘルヴェーク、ゲオルク・ヴェーアト等)の活動に焦点を当てつつ、テキストと時代背景の関わりについて考察を行っています。これにより、従来の三月前期研究において不足していた〈女性の側から見た三月前期〉の視点を再構築し、さらなる歴史的考証や分析を行う際に手掛かりとなる見取り図を提示しようと考えています。

三月前期研究
関連文献



研究のプロセス・研究事例

(1)三月前期の文学と政治

科研費課題への取り組みとして、カールスバート決議(1819年)や七月革命(1830年)といった歴史的事件が文学作品に及ぼした影響、歴史観の変化を後づけるための研究を行ってきました〔2021-2023年度、科研費・若手研究、グラッベ作品における自然表象について〕。「グラッベの劇作品に現れる自然表象はどのような狙いと効果をもっているか」という問いを出発点とし、時代を経るごとに〈ドイツ的风景〉が愛国的表象としての意味を喪失させられ、次第に諷刺やイロニーが重要な地位を占めるようになる経緯について考察しました。国土や政治形態のみならず、文化や芸術領域においても〈個別化〉の傾向が顕著になりつつあった1830年代の時代潮流に危惧を抱いたグラッベが、この状況を批判的に眺めつつ〈全体的なもの〉を回復させようとする試みとして、『ハンニバル』や『ヘルマンの戦い』といった歴史劇に悲喜劇の装いを施し、彼独自の演劇論に基づいて観客の啓蒙を試みていたことを明らかにしました。

(2)エマ・ヘルヴェークと三月前期

ドイツ語圏の女性文化についての研究会に定期的に参加し、文献の翻訳や討論等に取り組んできました。現在は三月前期の革命家エマ・ヘルヴェークを中心に、19世紀前半の女性知識人たちの活動状況についての資料を収集し、分析と考察を行っています。